―資料紹介―

安政五年　呉崎新田行手帳

後藤重巳

解題

豊後国国東郡西端から、豊前国宇佐郡の北部海岸にかけての周防灘遠浅海岸に、干拓型の新田開発事業が着手されたのは、文政後期から天保初期にかけてのことであった。この大・小規模十指に余る新田計画は、当時の西国郡代塩谷大四郎の「見立て」で実施されたものであり、施工主体者には、富裕農民・商人らのほか、「郡中」が見られた。

これらの諸新田の内、「呉崎新田」は、文政十年を前後する時代に開発されたものらしいが、その開発経緯については他の諸研究に譲るとして、新田は開発の後の耕営力（入植百姓）の確保、水利、肥料源（採草地）など多くの問題を抱えたが、遠浅海岸の埋め立ての場合、「悪水」つまり、排水をめぐる問題は切実であった。「呉崎新田」においても例外ではなく、開発後に、この問題で難渋することが少なくなかった。

本史料は、「呉崎新田」開発三十年後の安政五年、「悪水」対策として「南蛮樋」を設置することに関わる興味ある小史料である。

本史料は、本学史学科が所蔵する日田郡五馬市村庄屋文書の中の一点であり、形状は、縦十八・五、横十二センチ、

表紙とも四十葉の小帳で、筆記者は、五馬市村庄屋の謙平、外題は「安政五年午八月、呉崎新田行、手帳」とある。

手帳によると、

呉崎新田広瀬川・石部川之間、洪水之節、嶋原領草地・入津原・中伏三ヶ村より水押掛、沖手之田畑作毛腐ニ相成、年々難渋ニ付、石部川流末江悪水吐南蛮樋御普請御願御聴済ニ相成（下略）、

と見え、その工事の明細を記したものである。

記事内容では、新田村と隣接既存村との喧嘩事件から、新田村百姓が、生産した野菜などの販路を断たれて難渋し、結局はこの「出入り」を「吟味取下」の示談に持ち運ぶ経緯の明細や、南蛮樋居込工事に際しての、「樋」の構造図の図示など、小史料ながら、開発後の所謂「新田村」経営に関わる興味ある内容が見られる。

こうした新田造成・村経営に関わる関連史料は、日田市広瀬家文書の中には豊富に見られる所であるが、ここでは、余楮を利用して、以下に紹介するものである。

（表紙）

安政五年

呉崎新田行

手帳

午八月

五馬市謙平

（タテ十八・五、ヨコ十二・〇cm）

覚

豊後国日田郡
五馬市村
庄屋　謙　平

右は、就御用、明六日、豊後国日田郡陣屋差立、同国呉崎新田迄差遣候条、途中足痛ホニて人馬入用之所は、断次第御定賃銭請取之、無遅滞差出継立止宿ホ、都て無差支様可被取計候、此添触披見之上、可被相返候以上、

午八月五日

池田岩之丞手代
紅林伊九郎
同人手附
山崎信太郎
同人手代
相沢時之進

豊後国日田ゟ
同国呉崎まで
右村々
役人中

覚

一、人足弐人
内壱人四日市ゟ用意ニ不存候
但　両掛弐荷

右は、就御用拙者共儀、明六日昼八ッ時出立、呉崎新田江罷越し候間、書面之人足所相当之賃銭受取之、無遅滞御差出可被成候、且、止宿ホ無差支様御取計可被成候、此先状早々順達、右新田へ御届可被成候、以上、

午八月五日

日田
五馬市謙平
友田平右衛門

六日泊り　藤　山
守　実　日田ゟ四り
宮　園　二り
口ノ林　二り
八月七日泊り　樋　田　二り
福　嶋　二り半五

四日市　三り五
宇佐　一り
高田　二り
呉崎
新田　十八丁
右宿村々
御役頭衆中

申談書

一、呉崎新田石部川沖北土手江今般新規南蛮樋御普請ニ付、広瀬川南沖一円田畑持主共出夫可致候事、
但、比度御普請入用金之内、凡半方丈ヶ右地面持主ゟ仕法相立、拝借金御返納可致様申談可被置候事、
一、當月高汐時節ニ付、北沖壱番、弐番、三番、丁場損所、風波當リ強キ所へ、比度積廻シ有之砂利石、開(ママ)理可致候事、
但、積廻シ之砂利、石坪積リ村役人船頭立會、事実ニ相改可申事、
一、呉崎新田北沖外堤内通砂土手手薄キ場所は、見計手入可致候事、
一、同所雨樋共、番人は勿論村役人時々見廻り、高汐時節且風波強候節は、小前一統無油断見廻可致候事、
一、當午田方御検見之時節ニ相成候ハハ、例年之振合ヲ以、御検地合付小前帳相仕立、四日市表ニ可奉差上候事、
一、當午田畑作徳冥加米大豆ホ之儀も、畑方は綿大豆野菜類其外、西瓜ホ取入之模様ニ(ママ)撚ひ申談、村役人立會取調候様可取斗事、
一、呉崎新田入百姓、追々人家相増、最早人別も餘程多人数御座候間、村役人ゟ時々取締申談候様可取斗事、
右之通、ヶ條書を以取締方申談候事、
午八月　南高瀬新兵衛
庄手　三十郎
渡里　源平
呉崎彦兵衛殿

同　孝一郎殿
同　保右衛門殿
同　伊兵衛殿
同　禎　助殿
同　五人組中

八月六日　晴

四ッ時宿本出立、八ッ過ぎ郷宿重吉方着、渡り氏、友田氏其外共重吉方ニて用向承り、御用書左之通受取、

一、御添觸　　一、渡り氏ゟ書状一封
一、新開絵図　　一、南高瀬氏ゟ一封
一、北沖樋仕上帳　　〃日隈氏ニ届候
一、金三拾両　　普請入用内
一、〃拾両三分　　砂利代
一、〃三両　　但伊兵衛預り出也
一、〃弐両　　私用

同　七日　晴

五ッ時発足、友田氏同道守実村ニて千原氏被相待居候間、同所ゟ同人同道、夜ニ入樋田へ着、桑屋太郎八方へ一宿、

八日　晴

五ッ時樋田出立、七ッ時四日市着、年番所へ立寄千原氏、友田氏新田百姓嶋原様領中状村百姓喧嘩之義ニ付、罷出候段相断、明朝御役所へ可罷上段申之、なら屋林兵衛方へ一宿、尤右喧嘩一件、左之通、

作恐以書付奉願上候

当御預り所　豊後国国東郡
呉崎新田　弥兵衛
庄兵衛悴　種五郎
久米次悴　傅一郎

亨助倅　源平
松次郎
藤十郎
権平
〃

一、理不尽ニ打擲疵請出入

松平主殿頭御領分
同国同郡
中伏付
文吉
平八
磯平
茂八
源四郎
外村中不残
〃

右は、今二日未明、嶋原御領中伏村文吉外七、八人、呉崎新田定右衛門方江罷越、同人娘てつ、文吉呼出咄合も有之哉之所、右人数ニて手込、中伏村へ連越於途中散々ニ致打擲生死之程も難斗段、隣家之者聞付為知参り候間、打驚村役人へ届出候ニ付、百姓代亨助并久米次・万兵衛・勘兵衛・佐平・吉兵衛同道ニて、何ホ之訳有之、右様法外及候哉聞調罷越候内、傳一郎外六人之もの聞附、尋参〃、則右村組頭平右衛門方へ参、相頼示談中、同人義庄屋江問合取斗可申趣ニて立出候間、相待居候處、右村之もの多人数、棒・割木・飛口(ママ)・鍬之類銘々所持、呉崎のもの参候得は不残可相殺段高聲ニ申罵、右傳一郎外六人致打擲候段届出候間、村役人為見届可罷越出懸ヶ候所、中伏村中小前老若一同、竹鎗、棒之類銘々携相構居、乱坊可致躰ニ付、同村ニ立入候義難出来、其侭御注進申上、右乱坊御取鎮方奉願上候処、早速高田御役場へ、御懸合被成下、難有仕合ニ奉存上候、然ル処、追々親類、組合、村役人罷越、疵人共見請候処、大造之疵所、殊ニ暑気強、比上何様ニ至生死之程も難斗、一同當惑歎ヶ敷奉存候間、何卒格別御慈悲を以、右之始末、高田御役場江御懸合御

立合御検使被成下置候様、重畳奉願上候、依之印形書付を以、此段奉願上候、以上、

右新田
親　――――
〃　――――
組合　――――
――――

四日市
御役所

前書奉願上候ニ付、奥印形仕候、以上、

村役人
連名

一、右御立會検使出役、飯村半蔵殿、高田代官井上周蔵殿、御吟味之上、日田御役所へ被申立、御吟味中ニ候処、左之通願書差出候、

乍恐以書附御願奉申上候、

一、呉崎新田ゟ持出、賣弘メ候野菜類、高田芝崎は勿論、近村ニて売買差止申候、右は村役人ゟ之差図ニ可有御座、若買請候もの壱貫文宛過料為差出候段、高田芝崎村は高田角力花月野小巻ニて申觸、磯町志手村は中伏村長三郎惣平ニて申觸申候、

一、高田芝崎并近郷ゟ呉崎新田塩浜其外稼方罷出候もの、差止メ、壱人も雇入候もの参不申段事、

一、高田村大庄屋源助其外重立候商人共、綿作手入方呉崎新田之もの、日々五六拾人宛相雇居候処、當節相断候、尤、源助儀は、凡七町歩も作付候間、別て多人数相雇日々弐三拾人宛も参リ居候処、少々差支有之由ヲ以、先日ゟ相断候、

一、中伏村平五郎弟平八儀、重立打擲いたし候ものニて、御手当方之内ニ有之趣、右者、同御領水取村江日雇稼ニ罷出居候、其外共日々稼方仕居候由ニて、中ニは酒狂之余リ悪口杯仕候段、疵請候身寄之もの共承リ残念之段申立候、

右は、當月二日、呉崎新田百姓弥兵衛外六人、嶋原御領中伏村ニて打擲逢候始末、同三日御立會御吟味之節、廉々奉申上候處、追々嶋原御領之もの共、前書申上候通、品々迷惑之手法取斗、専新田之者共為致難渋候儀、重畳歎ヶ敷、尤、新田之儀は、野菜等賣代仕其日暮之もの多く、是迄高田芝崎江日々持出候得共、買請候之もの無之、依之嶋原御領之外ニて売代仕度存、持歩候得共、同御領分之内通路不致ては外ニ通路無御座、忍々罷通リ候得は、荷物無躰ニ買請、代銭は追て相渡杯、少年之ものは断方も不存、勿論面体存居候者ニ無之間、何国と差て可申立様も無御座、既ニ當月三日中伏村平右衛門子分米吉と申者、當新田久松荷物致桿売候處、呉崎之もの通リ懸リ、荷物は貫返申候、其外ニても、右様之仕有之、名前逸々不存可申上様も無御座、重畳残念ニ奉存上候、當新田之儀ハ、嶋原御領側先ニて、万事相随候處、此節中伏村と故障差起候とて、同村へ荷担仕新田之もの共へ、右様為致難渋候儀、甚難心得御百姓相続方ニも差支候儀ニ御座候間、乍恐前書奉申上候、廉々何率格別之御憐愍ヲ以、商向其外共是迄之通相成候様被仰付、御百姓安穏ニて出来仕候様被仰付被下置候ハハ難有仕合奉存上候、依之印形書付ヲ以、此段奉願上候、以上、

午七月十三日

豊後国国東郡
呉崎新田百姓代
亨　助
組頭
保右衛門
〃
伊兵衛
庄屋
彦兵衛

四日市
御役所

一、前断之次第ニ付、事実聞調、且品ニ寄為熟談、千原・友田両人被差向候事、

九日　晴　夜雨

一、朝、飯村様、馬場様并年番所へ罷出、且飯村様ニて子細御咄有之、則新田之者呼出状御渡ニ付所持、呉崎ニ参リ候、尤、旅仕たく之儘ニて罷上候、両公は羽織袴、

進　物

多葉粉　一斤宛

飯村様へ　謙平ゟ
馬場様へ

友田・千原両人ゟ

進物もの

飯村様へ　五色半切千枚
馬場様へ　薬子箱　一ッ

御門

坂本庄三郎様へ　煙草　二斤

年番所詰

江嶋嘉十郎へ　五色半切千枚
麻生善兵衛へ

四日市源五兵衛へ　煙草　三斤ツッ
山口甚五右衛門

一、四ッ頃、宇佐へ参詣いたし、八ッ頃呉崎本陣ニ着、組頭中其外罷出候間、會所申談書演舌いたし相渡候、当夜・翌朝村方ゟ相賄、翌昼ゟ手賄ニ致し候、当夜一番鳥立ニて御呼出之者出勤、尤、亨助外一両人ハ夕刻罷出候、

十日　曇天

夕刻、友田氏一同、四日市出勤之もの罷帰リ候、千原氏ハ芝崎迄参リ候由、当夜、僕源七大ニ腹痛、医を呼候得共差支不参、翌朝全快、

十一日　晴

普譜入用之内、伊兵衛へ金弐拾両相渡ス、夕刻、千原氏芝崎之仁紅粉屋源八郎同道ニて入来、一件咄しハなし、

十二日　晴

日田會所行御用状仕出ス、尤、普請汐時悪く、廿日過ゟならてハ難取懸ニ付、存外逗留ニも相成候間、代之義申遣候、

五ツ頃、千原氏紅粉屋一同引取、昼ゟ千間土手通リ北沖土手ゟ南沖此節普請場へ友田氏・孝一郎殿・亨助一同見分、僕源七、

一、蒲穂ハ、大体平均十貫目ニて代銀三拾五六匁位之由、孝一郎殿方杯ハ、凡六百貫目、生田屋伊兵衛方凡五百貫目、

一、塩濱小屋一ヶ所ニて一日十五六石、只今三ヶ所有之候間、凡四十石余も出来候由、

覚

天保四巳御高入

一、米貳石五合　但壱反ニ付米三升三合ツツ

弘化三午御高入

一、同五石九升四合壱勺　但壱反ニ付米二升八合ツツ

嘉永六丑御高入

一、同拾貳石五斗貳升九合六勺　但壱反ニ付米貳升六合

安政四巳御高入

一、同拾四石壱斗九升六合壱勺　但壱反ニ付米貳升三合ツツ

悪地床徳米

一、同壱石壱斗三升壱合

〆米三拾四石九斗五升五合八勺

内、米六石八斗　村役人五人定式給米

残米貳拾八石壱斗五升五合八勺

代札四貫八拾貳匁五分九厘　但米壱石ニ付百四十五分替

此金三拾六両壱歩貳朱　但金壱両ニ付百十貳匁替

端札八匁五分九厘

此銭五百十五文

右は、呉崎新田作徳米取立辻、書面之通御座候、以上、

安政四巳年十二月

呉崎新田

亨　助
与頭　伊兵衛
〃　保右衛門
庄屋見習　孝一郎
庄屋　彦兵衛

源平殿
三十郎殿
平左衛門殿
勘兵衛殿

十三日　朝雨　後晴

夕刻、千原氏芝崎ゟ入来、

十四日　晴

一、源七差返し候、新城氏ニ書状遣ス也、
一、朝村役人呼出し千原氏高田御役所へ被出候処、公辺ニ相成候も恐入事ニ付、植木角兵衛と申談、熟談可取斗由ニて、則同人と談し候処、野菜類其外好通差止候義ハ全無之、且打擲之始末ハ恐入候間、金壱両ツツ療治料として可差出段被申之候趣、尤、公辺ニ相成候得は、日田ニて裁許ニ相成哉多分大坂江戸表之内ニて御裁許ニ可相成、然ル時ハ不軽入用も費、其上御ケ条ニも疵不依多少療治料銀壱枚之もの之由ニ有之候間、何分ニも此所ニて熟談之方可然哉之段演舌、出席、彦兵衛・孝一郎・保右衛門・伊兵衛・亨助五人、

十五日　雨

一、千原逗留ニて片付方數々相談候得共、突留リ候事無之、

十六日　同

一、手透ニ付、別府ニ罷出候、人足新田之もの弥平召連、六ツ時分流川汐飽屋作太郎方ニ一宿、是は、野口村ゟ入込、町ニ至りしばらく有之、右へ取入込候得は、入江の向角之家也、宅ニ温泉有り、道中、新田ゟ芝崎（十四丁）・高田宇佐道ゟ左ニ取、山道ニ入四軒家・立石・金山・郷川（高田ゟ五リ）・かな越登り、一里下り一里と申所、日出御城下ヲ左ニ見て頭成（高田ゟ七リ）・小浦・古市・里谷・石垣原・野口・別府、

十七日　晴

一、別府出立、船ニて濱の市ニ参詣、所々見物夫へ（より）カ別府へ罷越一見之上、濱（マヽ）一ニ引取、夜船ニて別府へ暁六ツ時着、別府ゟ濱の市二里半、濱の市ゟ府内半道、尤、人家續、

十八日　晴

一、別府へ休足、無事、

一、戌亥ニ当リ、ほふき星を見ル、但、初更

一、此前ゟ東ニ当、夜暁ニ右星ヲ見ルと云々

十九日　雨

一、暁六ツ時、別府出立、夕刻呉崎帰着、

一、乙右衛門、昨十八日到着之由ニて広治・新城氏書状受取、

一、呉崎中伏引合一件も大方相済候よしニて、千原氏芝崎ゟ被参居候、

廿日　曇

一、千原氏、熟談書下認ニて、芝崎之方へ持参、

廿一日　晴

一、友田氏帰村、

一、乙右衛門、別府江遣ス、失念物取、

一、八ツ時頃、四日市年番所ゟ高田引合一条、今以何之左右無之、日田表へ御用状御仕立ニ付、御待被居候

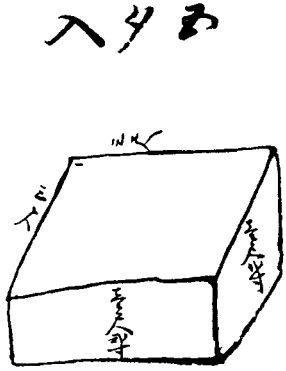
間、早々可申出旨御沙汰ニ相成候趣、友田氏・千原氏ニ申来候、依之保右衛門出勤候事、

一、小使源十郎雇入候事、

廿二日　晴

一、夜八ッ半時ゟ砂利改として、伊兵衛案内罷出候、但、箱ニて一艘分政之、同船六分穴ニ入候事、

一、砂利壱坪壱合七勺　　新蔵



口径ヲ六ニて割相乗じ
深ヲ六ニて割、是ヲ右
相乗積、五ニ乗じ
五勺ヲ見ル、
但、底蓋なし、

但、六艘　壱艘ニ付、壱合九勺五才

一、同　壱坪壱合七勺　　傳次郎

但、右同断、

〃　二坪三合四勺

此操入人夫九人　　西沖土手

一、千原氏高田表ゟ来リ熟談書之内、嶋原様領ゟ新田江罷越居候分ハ、高田除帳可致事、此廉相断候、其外少々除文之廉、付紙ニて持参、伊兵衛と談し之上、四日市表へ御伺可被成筈ニて当所出立、

一、伊兵衛案内ニて、普請場ニ罷出候、職人斗ニて、土手石垣取除此日無之間、引取候事、

輪木大小廿本程　　内五間木壱本代札四拾七匁位之由

木挽　貳人

石工　五人　　相見へ候

一、砂糖きび、拾貫目ニ付、銀三匁三分位之由、

一、保右衛門義、四日市表御吟味猶予願ヲいたし夜ニ帰リ候由、尤、千原氏ニハ不逢よし、

一、夜、真玉幡宮ニ参詣、

廿三日　晴

一、曉六ツ時ゟ砂利改、

一、砂利貳坪八合五才　浪平

但、拾六艘　壱合七勺五才ツツ

一、同　貳坪三合貳勺　安平

但、八艘　貳合九勺ツツ

一、同　貳坪九勺　用平

但、十一艘　壱合九勺

一、同　四坪三合七勺　半平

廿三　壱合九勺

一、同　貳坪四合　儀平

六　四合ツツ

一、同　壱坪壱合五勺五才　三平

七　壱合六勺五才

一、同　壱坪六合貳勺　専平

六　貳合七勺

一、同　七合壱勺　啓二郎

二　三合五勺五合

坪　拾七坪五合勺五才

一、砂利上ケ出夫　拾九人　但、壱人ニ付七分　早夫ゟ九ツ時迄

一、賃銭　壱人ニ付、貳匁六分之由宛

一、九ツ時分ゟ南沖樋居所土手土俵ニ入候事、

一、右出夫　拾貳人　伊右衛門　伊兵衛　手頭

一、日隈雄蔵殿内政、産後大病之由当家ニ申来候、

廿四日　晴

一、曉六ツ時、伊兵衛案内ニて、砂利上ケニ罷越、但、上ケ方一組八九人ツツ土手石垣ニ立置、小しょふけニ入、手繰ニいたし石垣裏穴ニ入候、人数三拾六人、

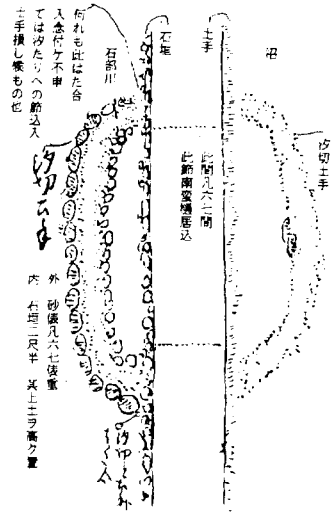
一、砂利運賃、一坪ニ札三貫目之由、

○麦肥シ芸州ゟ入百姓之者ハ、油はち札八匁五分位之はちを、植糞ニ三ツ、引糞ニ四ツ都合七はち斗も仕入、麦壱石六七斗も出来候由、但、壱反、

○田は四両、畑は貳両貳分位、壱反売買、尤、所之善悪ニもよるべし、

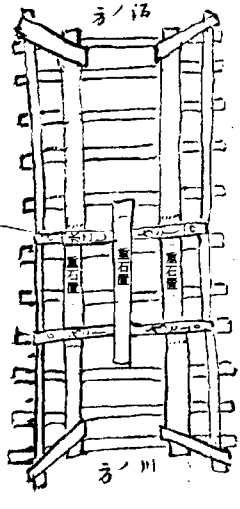
一、新樋場人夫不足之由、北沖ヘ申来候間、砂利上ケゟ

廿人計り四ッ頃遣ス、拙者も普請場へ罷越候事、
一、明俵縄付ニて、銭三拾六文位、
一、新樋場汐切致ス、人夫凡五拾人余、
一、夜番四人計り□し置、是ハ夜汐ニ土手切候節之用心、
尤、汐切土手丈夫ニ付、人数如斯、
一、夜汐引候ハハ、早速為知候様、右番人ニ申付置候事、
一、しっくい土拵入用むしろ、臼其外、伊兵衛方用意申
付候事、
一、賃銭、上四匁貳分、下三匁位も段々有之、

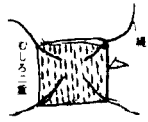


廿五日　晴

一、夜八ッ半時、汐干方罷出、土手を昼九ッ時迄ニ掘切
候、此土、両方汐切之上、又は土手汐切土手ニ持出
候事、
一、輪木居込候事、



一、しっくい之事、
赤土三升、かき灰三升余
塩壱升
右筵△ニ入、青松葉・わら之煎汁少し入、
両人ニて打返し〳〵　踏かたまり候を臼ニ
入舂也、



是ハ、輪木又ハ切石之合目を塗リ、其上を埴土ニて塗包也、

○此埴土は、海辺ニ有之由、瓦土之如し、

一、樋所、祈祷いたし候事、

一、用心俵、樋之大小・場所之善悪ニ従、少々用意致し可置、若汐切土手損し候節之手出、但、杭木同様、

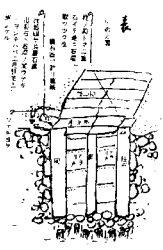
一、棟梁　佐左衛門、夫頭　与七郎・喜平　吉兵衛・円平・弥平　五人

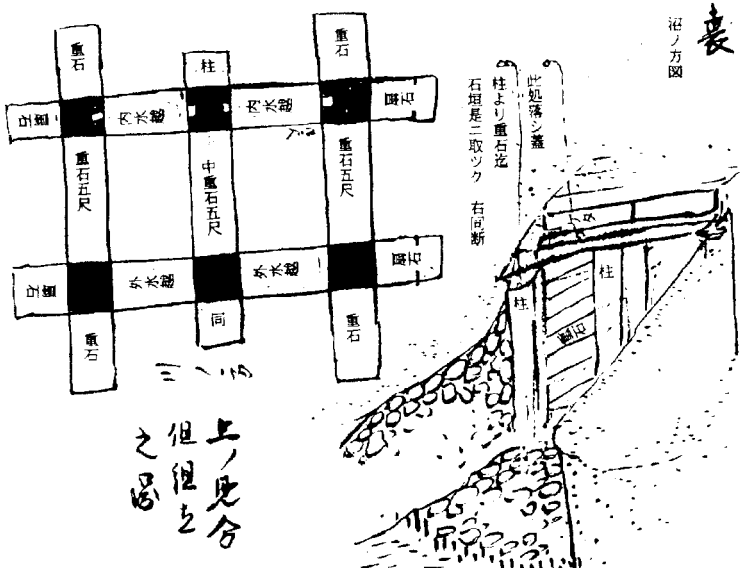
一、出夫　五十七八人

廿六日　雨

一、暁六ッ時出張　孝一郎殿加ル

一、重石、六枚ッツ　六（ママ）　合拾八本





水越石二枚ッツ　四　　八本
扇石　六枚ッツ　四　　廿四本
けた石　四　　四本
同　重石　四

一、輪木ゟ水越し石ハ　二枚重ル
一、出夫　八拾三人
一、千原氏　芝崎ゟ入来

廿九日　晴

一、千原氏、芝崎へ引取、
一、樋石垣、川ノ方出来、
一、出夫　八十

廿八日　晴

一、伊兵衛同道、砂利上ケ并改ニ掛、
此夫六十五人　但、此日村中家別樋普請へ加勢

一、砂利壱坪六合八勺　　友平
但、六艘　二合八勺ッツ
一、同　二坪三合　　孝四郎
但、十一艘　二合余
一、同　壱坪六合八勺　　仲平
但、六艘　二合八勺ッツ
一、同　壱坪五勺　　紋平
但、三艘　三合五勺

〆
六坪六合壱勺

先共四口
合　廿七坪九合四勺五才

一、砂利改方ハ　船頭壱人分之船之内、壱艘改之、右之坪數ヲ以ならし候間、仮令ハ、三艘分ならハ多少中之内、中ニて廻スベシ、尤、其内小石ニてまわさせ候方宜シ、

一、北沖東ノ角ニ、凡八反歩斗之無高場、民次郎と申者、村方江金四両差出相談之上開発致シ候趣ニ付、小作米之儀、御高地同様ニ郡方ニ差出候様申聞候事、

一、九ツ時、砂利上ケ之方、手頭亨助ヲ残シ、樋普請之方へ引取候事、

一、樋普請相仕廻ニ付、家頭不残ニ酒相廻し候事、職人手頭之物へ、餅差出、

一、彦兵衛殿一同、右場所江罷出候、但、羽織袴着之、

一、千原氏入来、今夕、熟談取替書調印之ため、中伏村役人三人、本陣ニ来候、当村役人と酒汲替し候事、

上棟(カ)祝儀

札三拾匁　杵築
〃十二匁　久兵衛
〃三匁　鉄二
〃三匁　信右衛門
〃五匁　安芸
〃廿匁　丁場師
〃十匁　大工森四郎
〃五匁　万兵衛
〃五匁　勘平

廿九日　晴

一、千原氏、当所ニて願下ケ願書為認、四日市ニ持参、当村之者、此夜九ッ立ニて同所へ出勤之申談、

一、先状左之通、

覚

一、人足壱人　但、両掛壱荷

右は、御用向相済、拙者儀、明晦日暁六ッ時、呉崎新田出立、日田へ罷帰候間、書面之人足所定之賃受取之、無遅滞御差出、且、止宿等無差支様、御取斗可被成候、此状早々御順達可被成、是段御頼申入候、以上、

午八月廿九日

日田　五馬市　謙平

高田

宇佐　四日市　福嶋　晦日泊リ　樋田　口ノ林　宮園　守実　伏木　秋原　財津　生の　日田表

右村々御役頭衆中、

追て此一紙、日田ニ至リ拙宅へ御届可給候、

一、改後砂利

一、二合九勺　安平

一、四合　儀平

一、壱合六勺五才　三平

一、二合七勺　千平

一、三合五勺五才　啓次郎

〆壱坪四合八勺

外　四坪四合　十一　儀助

壱坪七合五勺　五　次平

〆

一、呉崎芝崎引合一件済、御願下ケ左之通、

乍恐以書付御吟味下奉願上候、

当御領所豊後国国東郡呉崎新田弥兵衛・種五郎・源平・藤十郎・松次郎・権平・傳次郎義、当七月二日、松平主殿頭様御領分同郡中伏村文吉・儀平・政助・勇太郎・平八外大勢ゟ逢打擲、弥兵衛・種五郎義、別て疵受候段呉崎新田ゟ訴上候処、早速高田御懸合之上　御立寄為御検使被越候処、中伏村文吉・儀平・磯平・勇太郎・平八・庄作義も痛所有之段申上、一同御見分被成下、於御役所夫夫口書被仰付、追々御吟味中ニ御座候処、疵所追々平癒ニ付、内済仕度御吟味御猶豫相願、同国日田郡陣屋廻村庄屋千原順右衛門立入、双方得と承候処、当六月廿九

日夜、中伏村きミ娘りう義、呉崎新田住居貞右衛門娘てつと同道ニて貞右衛門方へ罷越候後、りう義、近村親族之者へ罷越、四五日逗留いたし候故、同人母きみ心配いたし候を、中伏村文吉・磯平等気之毒ニ存、りう行先てつへ相尋候ハハ可分と、当七月二日、右貞右衛門方へ文吉・磯平・儀平・勇太郎・庄作罷越、同人娘てつを呼出、りう行先得と相尋候積、中伏村同道いたし、同村嘉平物置蔵江為休候処、暑気堪兼、幸村方郷蔵明ニ有之、涼敷候間尚又右へ為涼置候内、呉崎新田ニてハ、てつを中伏村之もの共連行不法および候義と心得、請取方為咄合亨助・久米二・万兵衛・吉兵衛・佐平・甚兵衛等、中伏村組頭平左衛門方へ参リ候ニ付、平左衛門義ハ、兼帯庄屋田福村実蔵方へ為談罷越候跡へ、呉崎新田弥兵衛・種五郎・源平・藤十郎・松次郎・権平・傳一郎も追々様子聞ニ中伏村へ罷越候処、同日之義、中伏村祭礼ニて文吉・儀平・勇太郎・平八・政助・元治義、早朝ゟ酒給酩酊致居、呉崎新田ゟ何故大勢罷越候哉難相分承リ候積、組頭平左衛門方へ罷越候処、呉崎新田者共文吉を見懸ケ、てつハ何故連行候哉と声を懸ケ候を、儀平其外之者共義、文吉を呉崎新田之者共引立候義と心得違、酒狂之上前後不相弁、威し候積在合之竹切等取上ケ振廻し候処、過て弥兵衛・種五郎へ為疵負、源平・藤十郎・松次郎・権平・傳一郎も疵所等出来候義ニて、相手方ニても新田之もの共と打合、痛所出来候段申立候得共、右は竹切振廻し候粉れ、自身と聊之痛所等出来候義ニ有之、茂八・源四郎・平五郎・傳八・宗平義も相手之由願方ゟ申上候処、右之者共ハ、其場へ参リ合せ候而己ニて為疵負候義無之段相分、素ゟ意趣違恨等有之右始末および候義ニ無之、双方心取行違ゟ事起リ候段、事柄相分互に意趣相解候ニ付、相手かた文吉其外之者共義、酒狂とは乍申、貞右衛門始てつを連出し、其上弥兵衛・種五郎其外之者共へ疵負せかさつ之取斗等いたし候段、先非後悔いたし、願方へ厚相嘔、仲兵衛・種五郎其外之もの疵所等も平癒いたし、片輪ハ勿論、農業差支ニ不相成、相手文吉外二人ゟ聊之療治代差出、尤、貞右衛門義は元中伏村人別ニ候処、数年来呉崎へ住居罷在候義ニ付、今更中伏村へ引取候義は

難義ニ付、両村役人共申談、已来中伏村人別相除、呉崎新田人別へ積相心得可申、右ニて双方申分無之熟談相整、已来御願筋等無御座候間、右一件何卒御吟味御下被成下度奉願上候、右願之通御聞済被成下置候ハヽ、一同難有仕合奉存上候、依之連印書付、差上申候、以上、

午八月

松平主殿頭領分

豊後国国東郡中伏村

右親類惣代

組頭

庄屋後見

庄屋

当当分御預り所

同国同郡呉崎新田

右惣代

右組合親類惣代

貞右衛門娘

てつ

貞右衛門

百姓代

亨助

組頭

伊兵衛

傳右衛門

庄屋

彦兵衛

当御代官所

同国日田郡陣屋廻村庄屋

受取曖人

千原順右衛門

池田岩之丞様

御役所

内済書

（以下空白）

晦日　晴

一、朝五ツ時出立

一、彦兵衛殿御内政同道、是ハ雄蔵殿、御内政御病気ニ付、被越候、

一、四日市ゟ千原氏同道、六ツ時樋田着、御同人ハ口ノ林迄御越、

一、四日市御役所両御部屋へ罷越、飯村様・馬場様へ帰村之段申上候、

一、同所なら屋ニて、呉崎伊兵衛・亨助・万兵衛ニ逢候、是ハ高田引合願下ニ罷越居候、

一、六ツ時、樋田桑屋太郎八方へ着、尤、千原氏四日市ゟ同道、樋田ゟ夜ニ入、同人義ハ口ノ林迄行、

九月朔日　晴

一、六ッ時出立、守実ニて千原氏ニ逢候得共、同人義、同所談し向有之に付、先立罷帰リ候、夜五ッ時、重吉方着、

二日　晴

一、相沢様・山崎様御部屋へ罷出、夫ゟ御役所へ御届、御添翰御返上、日隈へ罷出病人伺候、

一、夜五ツ半時、帰宅、

一、僕賃銭、一日六匁当リ遣候事、

十一日　晴

一、昨日、仕上帳之義ニ付、伊兵衛罷出候段、会所ゟ飛脚参リ候間、今日出勤、

一、内入用書出、友田へ為持遣宜敷取斗被下度段申遣ス、

十二日　晴

一、仕上帳之義、伊兵衛ニ為認、筋内願筋ニ懸リ候事、

十三日　晴

一、御普請成就ニ付、為御礼伊兵衛同道、御元〻御三人様御部屋へ罷出、且、山崎様ニて仕上帳御内見之義申上候度（マヽ）、御役所ニ差出候様被仰渡引取候、

一、呉崎詰中入用、左之通渡候、氏へ差出ス、

覚

一、銅銭貳拾六貫三百六拾三文

是は、八月六日ゟ九月二日迄、謙平上下三人住返宿飯代并呉崎逗留中飯代其外諸入用込、且、友田平左衛門殿、千原順右衛門上下四人逗留中飯代、謙平ゟ遣払いたし候分共ニ如斯、

一、同　三貫五百拾六文

是は、四日市御両部屋其外進物代并道々小遣共、

一、同　壱貫七百五拾八文

是は、往辺之宿々人足賃

一、同　五貫二百七拾四文

是は、召連候乙右衛門日数廿七日賃銭

一、同　三貫五百拾六文

是は、千原・友田・五馬市上下六人、四日市泊り飯代酒
肴代、平左衛門殿ゟ仕払いたし候分、

〆

銅銭四拾貫四百廿七文

右は、呉崎新田御普請ニ付、罷越逗留中諸入用、書面之通御座候、以上、

午九月

五馬市村庄屋
謙平

御會所

右之外

金貳両貳朱

是は、賃銀之心ニて受取置

本仕上帳　左之通

石部川流末北土手

一、南蛮樋壱ヶ所　但、長六間　横九間　竪貳間半

此銀五貫八百四拾六匁九分貳厘

是は、呉崎新田広瀬川石部川之間、洪水之節、嶋原領草地・入津原・中伏三ヶ村江水押懸、沖手之田畑作毛腐ニ相成、年々難渋仕候ニ付、石部川流末江悪水吐南蛮樋御普請御願御聴済ニ相成候、諸入用之分、

此訳

水越石四本　但、長五尺五寸　壱尺角
代銀八拾目　但、壱本ニ付　銀貳拾目宛
柱石六本　但、長五尺　壱尺角
代銀百八匁　但、壱本ニ付　銀拾八匁ツツ
中柱内重石拾八本　但、長五尺　壱尺角
代銀三百貳拾四匁　但、壱本ニ付　銀拾八匁ツツ
桁石六本　但、長五尺五寸　壱尺角
代銀百三拾貳匁　但、壱本ニ付　貳拾貳匁ツツ
内外上桁石六本　但、長五尺五寸　壱尺角
代銀百三拾貳匁　但、壱本ニ付　銀廿貳匁ツツ

桁石上貳拾本
代銀四百目
上橋石拾貳本
代銀百八拾目
内外重石貳拾八本
代銀四百貳拾目
扇石四拾八本
代銀四百八拾目
割石面坪拾七坪
代銀貳百五拾五匁
裏石本坪拾貳坪
代銀三百六拾目
底疊石面坪九坪
代銀七拾六目五分
輪木拾八本
代銀三百五拾壱匁
松五尺杭三百本

但、長五尺　壱尺角
但、壱本ニ付　銀廿匁宛
但、長五尺五寸　壱尺角
但、壱本ニ付　銀拾五匁ツツ
但、長四尺　壱尺角
但、壱本ニ付　銀拾五匁
但、長四尺　八寸角
但、壱本ニ付　銀拾匁ツツ
但、面坪壱坪ニ付　銀拾五匁ツツ
但、本坪壱坪ニ付　銀三拾匁ツツ
但、面坪壱坪ニ付　銀八匁五分ツツ
但、壱本ニ付　銀拾九匁五分ツツ
但、壱本ニ付　銀壱分貳厘宛

代銀三拾六匁
白灰拾八石五斗
代銀百三拾三匁貳分
植（蒔カ）貳拾壱坪
代銀三百六拾九匁六分
縄拾束
代銀拾四匁五分
明俵四百五拾俵
代銀百拾貳匁五分
莚拾枚
代銀七匁
歯朶五拾束
代銀拾貳匁五分
塩四石
代銀五拾六匁
内外樋戸四枚
代銀四拾八匁

但、壱石ニ付　銀七匁貳分ツツ
但、壱坪ニ付　銀拾七匁六分ツツ
但、壱束ニ付　銀壱匁四分ツツ
但、壱俵ニ付　銀貳分五厘ツツ
但、壱枚ニ付　銀七分ツツ
但、壱束ニ付　銀貳分五厘ツツ
但、壱升ニ付　銀壱分四厘ツツ
但、壱枚ニ付　銀拾貳匁ツツ

居込石工九拾五工
　此賃銀四百八匁五分　但、壱工ニ付銀四匁三分ツツ
輪木拵木挽貳拾三工
　此賃銀六拾四匁四分　但、壱工ニ付銀貳匁八分ツツ
輪木組大工貳拾四工
　此賃銀六拾七匁貳分　但、壱工ニ付銀貳匁四分ツツ
蝋燭貳斤
　代銀四匁八分　但、壱斤ニ付銀貳匁四分宛
踏車損料
　銀拾三匁七分
人足八百三拾八人七分
　内、人足百五拾人　村方家別壱人ツツ出夫仕候分
残人足六百八拾八人七分　但、壱人ニ付銀壱匁七分五厘ツツ
　此賃銀壱貫貳百匁五分貳厘
〆銀五貫八百四拾六匁九分貳厘
　此金八拾九両三歩　永貳百拾文八分
右は、呉崎新田石部川沖北土手、南蛮樋居込諸入用、書面之通相違無御座候、以上、

安政五年年九月

国東郡呉崎新田
　組頭　伊兵衛
　〃　保右衛門
　庄屋　彦兵衛
日田郡惣代
　五馬市村庄屋　謙平

日田
御役所

覚

北沖
何番丁場之内
一、長何間何尺　但、口何尺深何尺何寸
　此坪　幾坪何合何勺
是算法、口深相乗ニ長を乗し、坪数也、尤、尺寸之分は六尺一間之六

ニて割、相乗する也、

右　寄

砂利三拾四坪三合壱勺

此銀　壱貫貳拾九匁三分　但、

此金拾五両三分　永八拾五文三分

右は、呉崎新田北沖外囲損所穴毎ニ埋立候、砂利、書面之通相違無御座候、以上、

午九月

右名前

日田

御役所

十四日　晴

○後

一、樋之図可婦せ、絵図ニ委敷記差上候様被仰渡候事、

一、仕上帳御納之処、元普請諸入用之内、半片ハ新田之者ゟ出金可有之様奉申上置候処、其訳無之間、取極可差出様被仰渡候ニ付、左之通、

○

覚

一、金八拾九両三分　永貳百拾文八分

内

四拾五両

是は、呉崎新田南沖百姓ゟ御拝借奉願、当未ゟ亥迄五ケ年賦ニ御返納支度奉願上候、

四拾四両　永貳百貳文八分

是は、郡方ゟ来ル十二月限り、御返納可仕分、

〆

右之通ニて、御聞済不足金三拾両御下渡ニ相成候、

十五日　晴

右相済、帰村いたし候、

（以上）